

彙報

一九九〇年一月より
一九九〇年二月まで

研究狀況

班研究

東 方 部

中國近世の法制と社會

班長 梅原 郁

本研究班では、一九八六年から四年間に亘つて中國近世、特に宋代の重要な法制史料である『慶元條法事類』と明板『名公書判清明集』とを精讀してきたが、最終年度に當たる本年は五月以降、こうした蓄積をもとに中國近世の法制・社會に關する研究發表を中心に行なつた。發表題目と擔當者は次の通り。

- 五月 八日 北宋の法典 梅原 郁
- 五月二二日 宋元時代の水利慣行―郷原體例再論― 徳永 洋介
- 六月一九日 唐宋時代の私鑄錢 宮澤 知之
- 六月二六日 唐宋時代の配流について 辻 正博
- 七月 三日 清代刑法における誤殺について 中村 正人
- 九月二五日 南宋期軍兵の給與額と給與方式について 長井 千秋
- 一〇月 二日 素描 宋代の罪と罰 川上 恭司

彙報

一〇月 九日 廟學典禮の成立とその性格の檢討 森田 憲司

一〇月一六日 清明集中の當事者による法律解釋について 佐立 治人

一〇月二三日 宋代の宗教法規 笠沙 雅章

一〇月三〇日 宋代明州の砂岸・砂岸錢について 本田 治

一一月一三日 宋代の軍法について 齊藤 忠和

一一月二〇日 訴訟をめぐる乾隆の文字獄 中砂 明徳

一二月 四日 乾隆の文字獄 井上 進

一二月一一日 唐代の橋梁管理法規について 愛宕 元

中國科學史文獻研究 班長 山田 慶兒
一九八七年から「中國科學史文獻研究」班を組織し、三カ年の豫定で、これまであまり取り上げてこなかった諸種の文獻の檢討を進めている。とりあげる文獻は大きく二つに分かれる。一つは、最近出土した科學文獻のうち、『新發現中國科學史資料の研究・譯注篇』を公刊した時點以後に公表されたもの。これはすでに譯注の作成を終えている。一つは、中國科學の個々の達成よりもむしろ、中國科學の方法・思想・組織、あるいは外國の知識の受容過程などがよくわかる、科學のすべての分野にわたる文獻。これまでに數學、天文學、本草、建築などの文獻數種を讀みすんできた。

會讀にとりあげた文獻はすべて譯注を作っている。編集・出版し、また最終年度にあたり、全員が別に研究論文の執筆をすすめ、『中國古代科學史論・續篇』として報告書にまとめ、現在印刷中である。

文人の生活 班長 荒井 健

一九八六年度より向こう五年の豫定で、舊中國の文人の生活全般について、「江南文人の研究」班の成果をふまえ、精神的・物質的の両面から総合的な檢討を行つてみようという目的で、本研究班を發足させる。舊江南文人班よりは一層廣範・包括的なテーマをあえて掲げたのは、班員おのおのの關心のありようからして、研究對象をむしろ限定しないほうをよしと考へたのである。研究の進めかたとしては、舊班と同じく、下記のとおり各分野の報告と並行して、明代十六世紀末の最も廣範圍の文人趣味文獻たる「遵生八牋」の内容を檢討して行く。今期は塵外選舉・起居安樂・延年却病・飲饌服食の各牋および燕閑清賞牋の一部に眼を通した。なおこれまで會讀を續けた「長物志」は、全卷の譯注稿を整理中。

六月一五日 泉屋博古館所藏品見學
六月二九日 坂出祥仲氏に聞く「内景圖とその沿革」

一二月二八日 金末元初の知識人と元曲 金 文京

一九二〇年代の中國 班長 狹間 直樹
本研究會は、一九八八年より向こう五カ年という豫定で發足しその三年目になるが、さきだつ「國民革命の研究」班の成果をふまえながら、研究對象とする時期を「二〇年代」にしほることによって、時代史的視角から國民革命期中の諸相

をとらえなおそうとするものである。各班員が、政治、經濟、社會、思想、文化などの諸テーマについて研究をすすめていることは以前と同様である。また、國外の研究者とも積極的に交流の機会をもつようつとめてゐる。十月二十二日楊天石氏(中國社會科學院近代史研究所研究員)、十一月二日魏宏運氏(南開大學教授)、十一月九日陳勝堯氏(中山大學教授)の報告はそれぞれ本研究所來訪のおりにお願いしたものである。九〇年の研究報告は次のとおりである。

- 一月二日 一九三〇年代の天津の銀號について 林原 文子
- 一月一九日 李儀社について 川井 悟
- 一月二六日 北伐開始後の國共關係の實相 北村 稔
- 二月 二日 中國農村における國家法と慣習 片山 剛
- 四月二〇日 一九八九年の歴史的經驗と「一九二〇年代の中國」研究 狹間 直樹
- 四月二七日 一九二三年恐慌と中國社會 森 時彦
- 五月二一日 一九二〇年代の文學的諸問題 — 謝冰心について — 萩野 修二
- 五月二八日 近代の財政について — 附加税問題と地方財政 — 岩井 茂樹
- 五月二五日 蔡和森と初期共產黨 石川 禎浩
- 六月 一日 清末民初における法制の近代化 小野 和子

- 六月 八日 民國繼承法の制定について 中村 哲夫
- 六月二五日 一九二〇年代朝鮮における孫文像 森 悦子
- 六月二二日 瞿秋白とソビエト革命論 江田 憲治
- 六月二九日 國民軍の成立 松尾 洋二
- 七月 六日 現代韓國社會と中國近現代研究の意義 青柳 純一
- 九月二一日 川鹽楚岸流通問題 森 紀子
- 九月二八日 歐米・日本・中國の思想連鎖 — 土地私有否定論を事例として — 山室 信一
- 一〇月 五日 中國近代知識分子形成の歴史的考察 鄭 海麟
- 一〇月二二日 民國期廣東省の田賦と苛捐雜税 片山 剛
- 一〇月二九日 地域史の中の國民革命 — 海陸豐農村闘争史 — 蒲 豐彦
- 一〇月二二日 アメリカにおける中國近代史資料について 楊 天石
- 一〇月二六日 四成洋税について 岡本 隆司
- 一一月 二日 南京政權の經濟建設(公開講演會) 魏 宏運
- 一一月 九日 近代中國社會思潮研究の若干の問題 陳 勝堯
- 一一月 六日 一九二〇年代の湖南について 清水 稔
- 一一月三〇日 清末士紳と近代教育 賀 躍夫
- 一二月 七日 清末、經濟の膨張と土着金融機

- 二月一四日 犬養毅と孫文 林原 文子
- 六朝道教の研究 班長 馬 燕
- 一九八六年四月に發足した本研究班もいよいよ最終年度をむかえた。これまで、梁の道士陶弘景が編纂した『眞誥』七篇全二十卷のうち、第一卷から第八卷までと第十九・二十卷との譯注をおえたほか、前年同様、左記の研究發表をおこない、活動に一應のしめくくりをつけた。なお、研究成果の一部は『中國古道教史研究』としてまとめ、出版する予定である。
- 一月三〇日 步虚詞について 深澤 一幸
- 二月二八日 『眞誥』愈安期本成立の時代的背景 三浦 秀一
- 五月一六日 遊仙詩の周邊 釜谷 武志
- 六月一三日 法琳の事蹟にみる唐初の佛教道教と國家 礪波 護
- 六月二七日 「天門」・「地戸」をめぐる 松村 巧
- 九月一九日 『道德眞經廣義』に見える儒道一致思想 坂内 榮夫
- 一〇月 二日 道教と天文學 新井 晉司
- 一〇月二四日 魔の觀念と消魔の思想 神塚 淑子
- 一一月 七日 初唐の詩人と宗教 — 盧照鄰の場合 — 興膳 宏
- 中國中世の文物 班長 礪波 護
- 本研究班では昨年に引き續き、隔週水曜日の研究会で、秦漢から五代に至る時代の出土文物に関する班員の研究發表が行われた。九〇年の發表題目は以下のとおり。
- 二月 七日 唐代の州縣官について — 貶官間

題を中心に——辻 正博

二月二日 『道徳眞經』玄宗御注及び疏をめぐって 麥谷 邦夫

五月 九日 唐碑の持つ政治的意味について 中砂 明徳

五月二三日 九巖山登攀記 長部 悦弘

六月 六日 敦煌吐魯番文書所見宴設司 劉 俊文

六月二〇日 法門寺塔下出土文物の整理と分析、あわせてその歴史について 氣賀澤保規

七月 四日 南北朝・隋代の道教造像について 神塚 淑子

九月二六日 韓愈「與大顛師書」吉川 忠夫

一〇月一七日 魏晋期樓蘭屯戍とその活動 伊藤 敏雄

一〇月三十一日 漢代の石刻について 角谷 常子

十一月四日 唐代の河中府城と河陽三城——浮橋と中潭城を伴った城郭—— 愛宕 元

十一月二十八日 神亭壺と東吳の文化 小南 一郎

十二月二日 随葬衣物疏續考 淺見直一郎

四—八世紀の中央アジアとインド 班長 桑山 正進

一九八六年四月より五年計畫で開始した當研究は、一九九〇年度をもって終了する。當期間は、特に八世紀の行紀である惠超「往五天竺國傳」と「悟空行紀」とを取り上げ、その現代日本語譯を作成することに集中した。本年度は全面的に譯の見直しを出版にむけて行ない、ほぼこれを完成し

た。譯作成の過程においてあらわれた歴史、言語、宗教に関する多岐にわたる疑問とその解答は、班員の各專家が注釋の形でこれを附す計畫であり、目下鋭意作成中である。なお、一月二三日には、北京大學歴史系副教授榮新江氏の、「中國における最近の中央アジア研究の現状」と題する講演を人文科學協會の協賛によって行なった。

中國古代禮制研究班 班長 小南 一郎

開始より二年目になる本研究班は、引續き「周禮」春官篇を賈公彦の疏で讀みつつ、本文と鄭注とを和譯し、注釋を付ける作業を進めている。本年は、禮の場で用いられる酒や敷き物や玉器などに關する定めを讀んで、一九九〇年末までに典瑞職まで進んだ。「周禮」疏の解讀と並行して、班員による次のような發表が行なわれた。

五月二二日 東周畫像文様に見える禮資料 小南 一郎

一〇月二三日 左氏禮學序説 吉本 道雅

十一月二七日 手偏の成立 大川 俊隆

六朝美術の研究 班長 曾布川 寛

一九九〇年四月から五年の計畫で始まった本研究班は、六朝を中心に後漢、隋唐を含めた時代を扱い、この時代の美術全般についてより精確な理解を目指そうとするものである。具體的方法としては發掘報告の相繼ぐ出土文物、急激な速度で公開されつつある石窟寺院などの佛教美術、この時代に興った畫論や書論の藝術論を三本の柱に取り上げることにする。初年度は班員の各々専門分野における以下のような研究發表を行い、非公式に畫論の會讀、石窟關係の造像記の會讀を行った。

五月一四日 南朝帝陵の石獸 曾布川 寛

五月二八日 Kushan 及び Gupta 時代

の Mathura 仏教彫刻

六月一日 花鳥畫の成立、背景 概觀 定金 計次

六月二五日 六朝時代初期金銅佛の素材と技法について 中野 徹

七月 九日 中國書畫論における品第法の展開——述書賦を中心に—— 大野 修作

九月二七日 酒泉丁家閣五號墓壁畫について——魏晋南北朝壁畫初探—— 河野 道房

一〇月 三日 桂林の調露元年銘像をめぐって 山名 伸生

一〇月二九日 佛塔塔基出土の舍利容器をめぐって 外山 潔

十一月二日 山東省の佛像——山東省博物館所藏品を中心に—— 岡田 健

十一月二六日 北魏洛陽永寧寺の塔と伽藍 田中 淡

十二月一〇日 漢代の青磁 伊東 徹夫

中國語史の資料と方法 班長 高田 時雄

本研究班は、中國語史を總體的に再構築することを目標とし、資料と方法の面からその基礎的整備を行うべく、今年度から新發足した。次のような研究發表が行われたが、そのうち林聯合・張振興・李新魁各氏のものには本研究所在訪問された折に、特にお願ひして御講演頂いたものである。

五月二八日 漢字の本質 森賀 一恵

六月一日 河南方言の特徴——鞏縣方言を中心に—— 太田 齋

七月 九日 苗語（黔東方言）における漢語

九月一〇日 借用語について 矢放 昭文
漢語詞彙統計・張振興
方言研究和漢語史 林 聯合

一〇月一日 宋代方言 平田 昌司
一〇月五日 敦煌毛詩音反切の再検討 遠藤 光暁

一〇月二十九日 甲骨の刻字法 阿辻 哲次
十一月二六日 上古漢語的複輔音韻尾 李 新 魁

十二月一〇日 譯官系唐音と黃蘗系唐音のあいだ 岡島 昭浩

日本部

近代日本のアジア認識

班長 古屋 哲夫

本研究は、近代日本においてアジアという言葉が、どのような情報にもとづき、どのような目的のもとに使用されてきたかを、明らかにしようとするものである。そしてそのためには、(1)アジアからの情報が日本にもたらされる道筋と仕組、(2)日本人のアジアへの要求のあり方と進出の仕方、(3)アジアの概念を利用した日本人の國民的使命感の創出、などの問題を検討することが必要となる。文學から何がみえてくるか 班長 飛鳥井雅道

二年目に入った當研究班では、讀書會の部で『ロビンソン・クルソー』を取り上げた。これは

京都大學出版會の第一回出版物『漂荒紀事』の復刻に迎合したわけではなく、「遅れてきた國々」の近代文學成立において、この作品が必ずといって良いほど翻譯されているという事情に據るものである。日本文學においてもそれは例外ではなく、明治期のすべてにわたってさまざまに形を變えて

登場している。これらの事實をめぐって、その文學史的意味や社會背景などを本國イギリスをも含めた他の國々とも比較して探ろうという試みである。

本報告はこれとは別に各擔當者の個別研究を報告していただいたが、期せずして翻譯文學、翻譯論が多く取り上げられたのは、研究會の今後の展開にとつて興味深いものがある。

「滿洲國」の研究

班長 山本 有造

本研究會は、日本の植民地支配の主要な一環をなした「滿洲」——中國東北地域について、その最終形態としての「滿洲國」期に焦點をあて、支配の實態を統一的に（政治的・經濟的・文化的諸側面、ならびに日本植民地史および中國地域史的アプローチを合せて）究明しようとする。一年間の準備會ののち、一九八七年四月より正式に發足し、現在隔週に研究會を開いている。

關西における關係研究者の数が限られているため、關東方面からゲスト・スピーカーを招くなど報告の幅を廣げるよう努力している。

貝原益軒とその時代

班長 横山 俊夫

一七世紀後半から一八世紀初頭にかけての安定期日本社會の性格を考えるため、貝原益軒の著述を學際的な視野から検討している。益軒の知的活動の廣さと讀者層の多様さが、その著述に獨特の社會性を與えていたと考えられるからである。

第三年度の活動として、益軒書簡類や『大學或問』を精讀しながら班員各自の益軒像を提示しはじめた。日本、東方、西洋各部にまたがる班員構成に加え、本年はオックスフォード大學からジェームズ・マックマレン博士、ライデン大學からトーマス・ハーバー博士、誠信女子大學から全相

運博士を客員に迎えた。

明治維新期の研究

班長 佐々木 克

現在の日本近代史研究の動向は、かつて明治維新を、絶對主義天皇政權の誕生とみなしていた見解から、論者によってはさまざまな註釋つきながらも、それはブルジョア革命であった、とする理解が主な潮流となっている。こうした變化をもたらした要因の一つは、急速に展開した地方自治體史の編さんにもなり史料の發掘であり、また公・私文書の大量の公開・刊行という新たな状況によるものである。しかしながら、明治維新についての發言は、ほぼ近代史の研究者に限られ、また新史料も必ずしも充分に消化・吸収されているとはいえない。そこで當研究班では、近世史研究者の協力を得て、新しい史料を把握した上で、研究史を再検討し、明治維新を化政期から憲法體制成立期（およそ一九世紀全體）に至る長い時空の中で考え、かつ政治のみならず、思想・文化・經濟・社會等々さまざまな分野からのアプローチを試み、しかも變革の面と繼承の面と雙方に留意しつつ個別研究を積重ね、最終的には、明治維新とはいかなるものであったか、ということを明確にすることを目標としている。

近世前期における政治的主要人物の居所と行動

班長 藤井 謙治

近世前期において重要な役割を果たしてきた人物の多くは、江戸時代一般の像からすれば思いのほか活潑な動きをしており、この期の政治史さらには文化史を考えていく上で、彼等のそれぞれの時點での居所を確定しておくことは、基礎的かつ不可欠である。そこで、このような基本的情報を學界全體が共有できるように蓄積し、同時に從來

年紀がないゆえに十分に利用されてこなかった主要人物の書状類の年代確定を行う。こうした作業を通じてこれまでとは異なる近世前期の歴史を描くことを目指している。初年度は各自擔當した主要人物の居所についての報告を行うとともに、大工頭中井家の文書を輪讀し、年代の確定作業を進めた。

西洋部・客員部門

法的思考の研究 班長 山下 正男

二〇世紀における論理學の研究はまことにめざましいものであるが、そうした論理學はすべて存在の論理學と呼ばれるべきものであって、當爲の論理學の研究は大そうおこなわれている。本研究はそうしたアンバランスを是正することを目的とする。そのために(1)義務論理學 (deontic logic) の確立、(2)法律家たちの現場における法的思考法の分析、(3)一般人の倫理・道徳の場における思考法の分析、等の諸作業をおこないたい。

以上の作業は論理學、法學、倫理學の各分野の専門家たちが共同しておこなうものとする。

- 班員 山下正男 井狩彌介(以上所内) 足立 幸男(教養部) 阿部昌樹 川濱昇 田中成明 山本克己(以上法學部) 濱野研三(文學部) 今井弘道(北大) 植松秀雄 江口三角(以上岡山) 龜本洋(金澤大) 玉木秀敏(大阪學院大) 服部高宏(國學院大) 平野仁彦(三重大) 深田三徳(同志社大) 松浦好治(大阪大) 森 際康友(名古屋大) 山本顯治(滋賀大) 若松 良樹(東和大) 平井亮輔 中山龍一 家族とハウスホルドの比較的研究 班長 前川 和也

前工業化段階の諸社會における「家族」と「ハウスホルド」の多様なあり方を考察している。中・近世ヨーロッパを専攻する班員がもつとも多いが、加え、一九世紀ヨーロッパ、古典古代、古代西アジア、イスラム、日本、中國研究者も参加している。

今後は、これまで確認された多様な事實を踏まえ、「家族」や「ハウスホルド」が社會・國家の中でもつた意味をあらためて問い直さねばならない。

民族誌記述の方法をめぐって

前年は、執筆を前提とした報告を重ねていったが、本年は最終段階として、提出された論文原稿の合評會をおこない、共同研究を終了した。成果は、共同研究報告『文化を読む——フィールドとテクストのあいだ』人文書院、一九九一年二月出版豫定。

知識と秩序——近代におけるその再編過程

班長 阪上 孝

フランス革命をはさんで一八世紀半から一八三〇年頃にいたる時期は、政治・經濟の領域のみならず知識の領域においても大きな革新が進行し、しかも、知識と社會の關係が大きく變化した時代である。社會秩序は神によって與えられたものではなく人間が創るものだという新たな前提のもと、秩序の建設のための知識の形成、その知識の制度化・社會化が重要な課題となり、またそれに伴って社會における知識人集團の問題が現れてくる。本研究は、フランス革命期を中心に知識と秩序の關係を多角的に検討することにより、近代社會の問題性をその原點において把握することを目的としている。現在、その最終年度を終え、報告書の

刊行を目指して班員各自の論文執筆とその検討作業を進めている。

知識と秩序(2)

班長 阪上 孝

本研究班は、三月で終了した共同研究「知識と秩序」の成果をふまえつつ、さらにフランス革命期以降の近代諸國家の形成にまで視野を廣げ、科學的知識と社會秩序の相互關係の再検討を進めている。初年度の現在は、フランスを中心として、アメリカ、イギリス、日本の近代化についての報告・討議を積み重ね、基本的な問題點の整理につとめている。

フランス・ロマン主義の研究 班長 宇佐美 齊

一九九〇年三月にいたる過去三年間にわたってフランス・ロマン主義の多角的な分析とその總合をめざして、各班員の口頭發表、討論を中心にした研究會を積み重ねてきた。活動開始後四年目にあたる四月以降は、成果報告書の作成に向けて論文の執筆作業にかかり、初稿のできたものから順次検討會にはかつて相互批判を重ねた。執筆者全員の最終稿が出揃った秋以降は、編集作業と並行して、これまでの成果を踏まえつつ更に新たな展望を切り開くべく、いくつかの口頭發表がなされた。なお成果報告書は一九九一年三月に、筑摩書房より刊行される。

傳統文化の構造——古代インドとインド・ヨーロッパ

パ・民族の文化比較 班長 井狩 彌介

本研究班は最終年度を迎え、前年度に引續いて北西インドのカシミール地域におけるヒンドゥーイズムの傳統文化がどのように編成されたかの諸問題を、同地最古のヒンドゥーイズム文獻「ニールマタ」を中心に検討を進めつつある。現在、同書に記される儀禮、曆法、聖地傳承神話などの中

心主題に關してヒンドゥーイズムの他の同種文獻、後代の綱要書(ダルマニバンダ)などとの比較を通じて本書の内容の特徴を明確化する作業を進めると共に、本研究の最終成果として刊行を予定している論文集の作成に向けて、各班員が執筆中の個別論文の中間発表と討議を重ねつつある。

- 班員 井狩彌介 ミヒヤエル・ウィッツェル
- 船山徹 山下正男(所内) 狩野恭 徳永宗雄
- 御牧克己(以上文學部) 赤松明彦(九州大)
- 永ノ尾信悟(國立民族學博物館) 榎本文雄(華頂女子短大)
- 黒田泰司 八木徹(以上大阪學院短大)
- 島岩 引田弘道(以上愛知學院大)
- 正信公章 渡瀬信之(以上東海大)
- 竹中智泰(常葉學園大)
- 中谷英明(神戸學院大)
- 林隆夫(同志社大)
- 藤井正人(大阪大)
- 矢野道雄 山上證道(以上京都産業大)
- 儀礼的暴力の研究 班長 田中 雅一
- 初年度(一九九〇年)は主に多様な視點より暴力の宗教的意味合い、および儀禮における暴力的要素を論じた。
- 班員 田中雅一 井狩彌介 鈴木啓司 谷泰
- 富永茂樹 藤田隆則(以上所内) 菅原和孝(教養部)
- 阿部泰郎(大手前女子大)
- 大越愛子(近畿大)
- 大塚和夫 田邊繁治 吉田憲司(以上國立民族學博物館)
- 小田亮(桃山學院大)
- 春日直樹(奈良大)
- 川村邦光 松村一男(以上天理大學)
- 栗本英世(東京外大)
- 長島佳子(大阪學院大)
- 松田素二(大阪市立大)
- 三浦耕吉郎(佛敎大)
- 岡田浩樹(総合研究大學院大學博士課程)
- 棚瀬慈郎(學振特別研究員)
- 西井涼子(京都大學社會學博士課程)

- 四月二三日 問題提起 田中 雅一
- 五月 七日 供儀論の再検討―儀禮的殺害を巡る三つの解釋文脈― 谷 泰
- 五月一四日 若ものの力の行方―明治期における民俗・風習の解體/回収 川村 邦光
- 六月一日 北タイの供儀と憑依 田邊 繁治
- 六月二五日 フランス革命と暴力―政治と宗教との關係について― 富永 茂樹
- 七月 二日 暴力のテクスト・テクストの暴力―予備的報告― 大塚 和夫
- 七月二六日 邪術と變身 吉田 憲司
- 九月一〇日 舞臺の上の暴力―ギリシア悲劇の女性たち― 松村 一男
- 一〇月一五日 「暴力論」論 鈴木 啓司
- 十一月 五日 儀禮的暴力と實體的暴力のあいだ 菅原 和孝
- 十一月二六日 フェミニズムが讀む文化・性・暴力 大越 愛子
- 漢代出土文字資料の研究 班長 永田 英正
- 本研究班では昨年に引き続き、主に漢代石刻資料の釋讀と注釋を進めてきた。班員が分擔して作成した譯注を毎週の研究会で検討し、最終年度である今年度には、殘缺のあるものも含めて主要なもの全てを讀み終えることができた。また、研究会と並行して、敦煌漢簡と研究所未收の石刻資料をカード化する作業も終了した。なお、三年間に亘って續けられてきた譯注作業の成果は、近年中

- に『漢代石刻資料集成』(假題)として發表される予定である。本年の譯注擔當者は次の通り。
- 一月一九日 孔謙碭・孔彪碑 大川 俊隆
- 一月二六日 李孟初碑・鄭固碑 渡邊信一郎
- 二月 二日 大吉買山地記・延光買地券・宋伯望刻石他 吉本 道雅
- 五月一八日 繆守墓誌・元嘉元年畫像題記・曲阜徐家村畫像題記・許阿壘墓誌他 角谷 常子
- 五月二五日 郭有道碑・安陽殘石四種 船越 信
- 六月 一日 右扶風丞李禹君表記・楊叔恭殘碑・楊淮表記 末次 信行
- 六月 八日 朝侯小子殘碑・甘陵相尙博殘碑 杉本 憲司
- 六月一五日 延光殘碑・陽嘉殘碑・張壽碑 藤田 高夫
- 六月二二日 魯峻碑 永田 英正
- 六月二九日 武班碑・武榮碑 江村 治樹
- 九月二一日 曹全碑・西岳神符刻石・西南之精刻石・天□建立刻石 小南 一郎
- 九月二八日 夏承碑 大川 俊隆
- 一〇月 五日 王舍人殘碑 角谷 常子
- 一〇月一九日 池陽令張君殘碑 辻 正博
- 三公山碑 富谷 至
- 孔君墓碭・孔褒碑他 藤田 高夫
- 十一月一六日 四川昭覺縣出土石表 江村 治樹
- 仙人唐公房碑 稻葉 一郎
- 上谷府卿墳壇刻石・祝其卿墳壇

刻石・菜子侯墳壇刻石他

杉本 憲司

二月 七日 蒼韻廟碑・□郡太守殘碑

松井 嘉徳

○個人研究

日本部

日本近代文化史の研究 飛鳥井雅道

日本ファシズムの研究 古屋 哲夫

植民地經濟の研究 山本 有造

廢藩置縣の研究 佐々木 克

文化史および文明史としての國民國家の形成 横山 俊夫

日本近世社會における政治權力 藤井 讓治

政治文化の中の社會理論 山室 信一

日本近代文學の研究 平田 由美

近代日本形成期における地域構造 奥村 弘

日本近世の地域社會の研究 塚本 明

西洋部

西洋論理想史 山下 正男

社會的相互行為の解讀 谷 泰

思想と制度 阪上 孝

シユメール行政・經濟文書の研究 前川 和也

インド世界の儀禮の研究 井狩 彌介

フランス散文詩の研究 宇佐美 齊

群衆現象の社會學 富永 茂樹

南アジアにおける宗教と社會 田中 雅一

文學理論の研究 大浦 康介

ヨーロッパ一二世紀の論理學と意味論 岩熊 幸男

西歐中世の身分論と社會メタファー

甚野 尙志

デカダンス文學における自己矛盾の研究 鈴木 啓司

音聲形式の記述と分析 藤田 隆則

フレデリック・ハリスンとイギリス實證主義 光永 雅明

ドイツ中世のエトノス 佐々木博光

東方部

中國の詩學 荒井 健

宋代の官僚制度 梅原 郁

六朝隨唐精神史 吉川 忠夫

隋唐政治社會史研究 礪波 護

五四時期中國社會主義の研究 狹間 直樹

ポスト・リクタン・期中央アジアの考古學的研究 桑山 正進

古代中國における説話傳承の研究 小南 一郎

中國中世土地所有制の研究 勝村 哲也

六朝道教思想研究 麥谷 邦夫

中國美術の様式と意味 曾布川 寛

中國建築の様式・技法・空間 田中 淡

近代中國の綿紡織業 森 時彦

敦煌文書の言語史的研究 高田 時雄

中國古代中世の法制 富谷 至

東北作家の文學 村田 裕子

明清學術史の研究 井上 進

清朝前期における士大夫の思想 三浦 秀一

中國古代都市の研究 佐原 康夫

漢唐間における天文學と文化 新井 晉司

中國における革命主體形成の研究 小林 敦子

中世近世の中國繪畫研究 河野 道房

イスラーム勢力進出期のアフガニスタン・北イ

ンド 稻葉 稜

唯識思想研究 船山 徹

中國中世の政治と社會 辻 正博

中國共產主義運動の歴史と思想 石川 禎浩

唐宋時代の士人 中砂 明德

東方部研究会

學報豫備發表 三月 七日 唐代貶官考 辻 正博

王逸「楚辭章句」をめぐる 漢代章句の學の一側面 小南 一郎

漢代祠堂畫像考 佐原 康夫

南朝陵墓の石獸と磚畫 曾布川 寛

學報第六二冊書評 一月 三日 吉川論文評 森 時彦

勝村論文評 新井論文評 荒井 健

狹間論文評 小南論文評 稻葉 稜

麥谷論文評 曾布川論文評 勝村 哲也

礪波論文評 高田論文評 狹間 直樹

荒井論文評 河野 道房

高田論文評 富谷 至

河野論文評 小林 敦子

梅原論文評 梅原 郁

井上論文評 三浦 秀一

三浦論文評 石川 禎浩

田中論文評 井上 進

森論文評 吉川 忠夫

田中 淡

事業概況

夏期講座——世界再讀——

一九九〇年八月

於 本館大會議室

一日 古文の現代語譯——その源流と原理をめぐって
T・ハーバー

「内地」と「外地」——明治憲法と日本植民地——
山本 有造

二日 最近の中國からの人材流出
小林 敦子

性の刑罰——官刑——
富谷 至

三日 知的エリートと民主主義——ヴィクトリア朝イギリスの社會再編成——
光永 雅明

日本の城とヨーロッパの城
山下 正男

開所記念公開講演會
於 本館大會議室

一九九〇年一月八日

明治地方自治制からみた明治憲法體制
奥村 弘

ロマンス・ロマンス・ロマンスチック
大浦 康介

律令と勅令——唐から宋へ——
梅原 郁

一九九〇年度漢籍擔當職員講習會

〔漢籍電算處理〕は、本學大型計算機センターの協力を得て、一〇月一日から同月五日まで次のとおり行われた。

一日 人文科學とデータベース(講演)
大型計算機センター教授
星野 聰

東洋學文獻類目の編纂とフォーマット(講義)
都築 澄子

東洋學文獻類目の計算機處理(講義)
大型計算機センター技官
河野 典

東洋學文獻類目と漢籍目錄の電算化(講義)
勝村 哲也

漢籍入力に便利な三角編號法(講義)
勝村 哲也

大型計算機センター見學
計算機處理入門(講義)
大型計算機センター技官
隈元 榮子

データベースについて(講義)
大型計算機センター助手
川原 稔

データベース檢索(一)(實習)
知識情報處理(講義)
大型計算機センター助手
石橋 勇人

マルチメディアと言語處理(講義)
大型計算機センター助教授
久保 正敏

データベース檢索(二)(實習)
UNIXと情報檢索(講義)
大型計算機センター助手
安岡 孝一

漢字コードの話(講義)
大型計算機センター技官
小澤 義明

データベース檢索(三)(實習)
大學閉ネットワークサービス(講義)

大型計算機センター技官
櫻井 恆正

情報ネットワーク(講義)
大型計算機センター助教授
金澤 正憲

質疑應答
一九九〇年度漢籍擔當職員講習會

〔中級〕は、一二月二六日から十二月一日まで、次の通り行われた。

二六日 漢籍一般(講義)
梅原 郁

史部書(講義・實習)
磯波 護

二七日 經部書(講義・實習)
小南 一郎

子部書(敦煌)(講義・實習)
高田 時雄

二八日 集部書(講義・實習)
荒井 健

二九日 叢書(講義・實習)
勝村 哲也

藏書家(講義)
滋賀大助教授 井波 陵一

三〇日 朝鮮本(講義・實習)
山田教授 藤本 幸夫

一日 實習
質疑應答
梅原 郁

所員動靜
・村田裕子助手(東方部)は、辭任(三月三十一日)の上、山梨縣立女子短期大學國際教養科助教授に轉出

・佐原康夫助手(東方部)は、滋賀大學教育學部講師に昇任(四月一日付)

・甚野尚志助手(西洋部)は、東京大學教養學部助教授に昇任(四月一日付)

・相川佳子子奈良女子大學家政學部教授は、併任

教授(東方面)。(比較文化部門、四月一日〜一九九一年三月三十一日)

・谷山正道廣島大學助教は、併任助教(日本部)。(比較文化部門、四月一日〜一九九一年三月三十一日)

・富谷 至助教(東方面)は、大阪大學教養部講師より昇任(四月一日付)

・石川禎浩氏を助手(東方面)に採用(四月一日付)

・佐々木博光氏を助手(西洋部)に採用(五月一日付)

・中砂明德氏を助手(東方面)に採用(二月一日付)

・桑山正進教授(東方面)は、三月八日伊丹發、インドに於いて佛教遺跡の保存整備に關する基礎的調査研究を行い三月十七日歸國。

・前川和也教授(西洋部)は、七月一六日伊丹發、大英博物館においてシュメール楔形文書の研究及びライデン大學において、同出版打合せを行い、八月二〇日歸國。

・田中雅一助教(西洋部)は、文部省科學研究費補助金により、七月一七日伊丹發インド・デリー、マドラス市内において上座部佛教圈における宗教と社會についての研究調査を終え、八月二五日歸國。

・田中 淡助教(東方面)は、八月一日成田發、ケンブリッジ大學ニードム研究所において開催の第六回中國科學史國際會議に出席、併せて大英博物館において研究資料蒐集を行って、八月一日歸國。

・狹間直樹教授(東方面)は、八月一日伊丹發、中國、香港、マカオにおいて開催された國際學

術討論會に出席、併せて研究資料蒐集を行って、九月三日歸國。

・森 時彦助教(東方面)は、八月一日伊丹發、香港において開催の「近百年來之中日關係國際學術研討會」に参加して、八月一四日歸國。

・梅原 郁教授(東方面)は、八月二七日伊丹發、上海博物館、雲南省博物館、敦煌博物館等において、唐宋文化社會の研究に關する資料蒐集を終え、九月一〇日歸國。

・船山 徹助手(東方面)は、一〇月一日伊丹發、ウィーン大學において、ジュニャーナシュリーミトラの研究(インド佛教知識論の研究)を行い一九九一年七月三十一日歸國予定。

・曾布川寛助教、河野道房助手(東方面)は、一〇月三日伊丹發、中國において開催の敦煌學國際學術討論會に出席し、中國美術資料蒐集を終え、一〇月二八日歸國。

・田中 淡助教(東方面)は、一〇月七日伊丹發、中國において、貴州トン族の高床住居と集落構造に關する調査と研究を行い一〇月二七日歸國。

・田中雅一助教(西洋部)は、一二月八日伊丹發、インド・デリー大學、マドラス大學において、インド寺院文化に關する研究資料蒐集を行い、一九九一年一月一日歸國予定。

・長廣敏雄名譽教授(八四歳)は、一二月二八日逝去されました。

・外國人研究員(日本學客員部門)
Thomas Harper James 國立ライデン大學日本學センター講師
一七・一八世紀公家の知的活動の解明

・受入教官 横山助教
期間 四月一〇日〜一九九一年一月三十一日
外國人研究員(比較社會客員部門)
Jean-Marie Schrier フランス國立科學研究センター研究員

・文學理論及びヨーロッパの言語と藝術
受入教官 大浦助教
期間 九月一〇日〜一九九一年五月九日

・本學招聘外國人學者受入れ要項により、本研究所において共同研究に参加する外國人學者は次のとおりである。
招聘外國人學者(教授)
全 相 運 誠信女子大學教授
古代韓日技術交流史ならびに近代西歐科學受容史をめぐる韓日比較
受入教官 横山助教
期間 三月二日〜一九九一年二月二八日

招聘外國人學者
顏 娟 英 臺灣中央研究院歷史語言研究所副研究員
唐代佛教美術の研究ならびに共同研究「中世の文物」に参加
受入教官 曾布川助教
期間 九月八日〜一九九一年六月三〇日

鄭 海 麟 深圳大學副教授
日中現代問題比較ならびに「一九二〇年代の中國」に参加
受入教官 狹間教授
期間 八月二〇日〜二月八日

Ebrey Patricia Buckley イリノイ大學教授
唐・宋の變革に關する研究

受入教官 梅原教授
期間 十一月一日～一九九一年三月三十一日

・本學研修員規程により、本研究所において、研修する外國人研修員とその題目は次のとおりである。

Messil Evelyne

八～一〇世紀の成都に於ける歴史・宗教・美術の研究
受入教官 荒井教授

期間 四月一日～一九九一年三月三十一日

賀 躍 夫 中山大學歴史系博士研究生

清末民初中國の社會思潮變遷與日本

受入教官 狹間教授
期間 一〇月二日～一九九一年三月三十一日

・本學研究生規程により、本研究所において、研究する外國人研究生とその題目は次のとおりである。

Guarino Marie ロンビア大學博士過程學生

宋代の經筵について

指導教官 礪波教授

期間 一〇月一日～一九九一年九月三〇日

馮 璋 復旦大學博士課程學生

日英文化比較

指導教官 山室助教授

期間 一〇月一日～一九九一年九月三〇日

出版物

紀要

東方學報 第六二冊(紀要第一二一冊)

一九九〇年三月三十一日刊

人文學報 第六六號(紀要第一二二冊)

一九九〇年三月三十一日刊

研究報告その他

調査報告三六號 明治中期讀賣新聞文藝關係記

平田 由美

一九八九年一〇月三十一日刊

慶元條法事類語彙輯覽 梅原 郁編

一九九〇年三月三十一日刊

カービンIIガンダーラ史研究 桑山 正進

一九九〇年三月三十一日刊

所報「人文」第三六號

一九九〇年三月三十一日刊

要覽第一三號

一九八九年二月二十八日刊